

## ■ FOMC通過でひとまず円高圧力もジワリ解消へ…

世界中の市場関係者や市場参加者らが大いに注目していた米連邦公開市場委員会（FOMC）がようやく閉幕した。「ようやく」と言いたくなるほど、今回は事前に強まった勝手な期待や飛び交った憶測などによって国際金融市場が大混乱に見舞われ、正直なところ辟易とさせられた。

まさに、2013年5月に生じた「テーパー・タントラム」とよく似た状況に陥り、一旦は世界同時株安の様相を呈することにもなった。もっとも、テーパー・タントラムで一時期混乱した米株式相場のその後の推移は、下図に見るように長い目で見れば基本的には右肩上がりとなった。



確かに、2015年12月に実施された9年ぶりの米利上げに相前後して、NYダウ平均が大きく調整する場面もあった。現在は当時の状況に似ていると言えるかもしれない。

言うまでもなく、利上げは消費経済が活発であるが故に生じるインフレを抑えるために行われるのであるから、当局の対応が適切であれば経済は成長し、結果的に企業の収益力がアップすれば株価も上がり続ける。

肝心の「当局」は、今回のFOMCにおいて大方予想通りの政策方針を打ち出した。ただ、その後米連邦準備理事会（FRB）のパウエル議長が会見で発したコメントの一部は、想定よりタカ派な印象と捉えられた模様である。その証拠に、それまで大きく上昇していたNYダウ平均が議長会見の内容を受けた途端に前日終値比でマイナス圏に沈んだ。

米株価の動きに神経質にならざるを得ないのは、このところの外国為替相場が米株価の上げ下げを横睨みして動いているためである。株価が下がればリスクオフで、ドルが買われて同時に円も買われやすくなる。どちらかと言うと、リスク回避のための円買い圧力の方がより強くなるケースは多く、ゆえにドル/円も今週24日には一時113円台半ばの水準を試した。

ただ、前回更新分の本欄で注目したように、足元のドル/円が一目均衡表の日足「雲」上限や89日移動平均線が位置するところで強く下値サポートされていることも事実。さらに、FOMCを通過したことで市場のリスク回避ムードは多少なりとも後退しており、同時に円高圧力も徐々に解消されはじめている。

急反発とまではいかないまでも、ドル/円はFOMCの結果が判明する前から強含みで推移しはじめ、執筆時までには114円台後半の水準を戻してきている。1月4日高値から24日安値までの下げに対する半値戻しが115円手前で、まずは同水準が試されているわけだが、すんなり115円台に乗せてくれば次に61.8%戻し=115.25円あたりが試されると見る。

一方、ユーロ/ドルはFRBの強いインフレ対抗姿勢を受けて、およそ1カ月ぶりに1.1250ドル処を下回る動きになってきている。少なくとも、ウクライナ緊張を巡る警戒が解けるようにならない限り、ユーロを積極的に買い上げることは難しい。ひとまず、当面は1.1200ドル処が意識されやすいと見ておきたいところである。

(01月27日 10:00)